未来型図書館を共に創る！

こまつリビングラボ

～第5回　開催概要～

1 開催概要

■ 日時　　：2024年2月4日（日）
　　14:00 - 16:30

■ 開催場所　：小松市役所７階会議室

■ 参加者　　：６６名

今年度の最終回も、たくさんの
方々にご参加いただきました！

2 プログラム

1．挨拶（宮橋 勝栄 市長）
2．これまでの振り返りと未来予想図作成の進捗状況
3．話題提供（活動紹介）（こまつ子ども司書クラブ、
　図書館エディターこまつオルワ’ｓ）
4．安岡先生の講演（リビングラボを学ぶ）
5．トークセッション
6．閉会・記念撮影

スピーカー＆コーディネータ

宮橋勝栄 小松市長

デンマークロスキレ大学 准教授
安岡 美佳 氏

青山学院大学 教授
野末 俊比古 氏

3 参加型トークセッションの内容

トークテーマ　「リビングラボの小松モデル」を考えよう！

今年度の取組み、安岡先生のご講演、トークセッションなどを踏まえて、
こまつのリビングラボの**カタチ**を考えよう！

「イマキク」というリアルタイム
アンケートシステムを活用した、
「参加型」のトークセッション
を実施しました！

これまでの振り返りと未来予想図作成の進捗状況

第1回 基本構想の12の役割の深堀り、融合・連携を考え、具現化した**機能・サービス**

第2回 未来型図書館を通した活動を描いた**「共創シーン」**

第3回 機能・サービスのつながりを踏まえた未来型図書館の**ゾーニング**

第4回 **周辺との連携・まちの回遊性向上**に向けた**取組み**

市民の想いを可視化

▲作成中の**「未来予想図」**（2/4 第5回リビングラボ時点）

活動紹介　～共創による図書館づくりのための人材育成～

☑子ども司書クラブ

- 21人で**「本と人を結ぶリーダー」**を目指して活動中！
- 自分たちで活動内容・計画を立てて実践。
- 「活動目標」
  1. 本の面白さを知ってもらおう！
  2. たくさんの人に図書館に来てもらおう！
  3. 図書館を明るく楽しくしよう！
  4. みんなで明るく元気に活動しよう！
  5. 本と人をつなぐリーダーになろう！
- 「主な活動紹介」
  - POP・展示コーナーづくり
  - インフルエンサー「りみぽ」さんによる動画編集講座
  - 空とこども絵本館で「読み聞かせ会」
  - マスコットキャラクターづくり
  - 岐阜市子ども司書のメンバーとの交流会
  - 小学生ミニビブリオバトルに出場
  - 絵本作家 中川ひろたかさんの講演会に参加

▲発表の様子

▲発表スライドより抜粋

※ 活動の様子はこちらをチェック☞ https://www.city.komatsu.lg.jp/soshiki/1009/zinzai/16059.html

☑図書館エディターこまつオルワ’ s

- 「図書館エディター」
  小松市の**「ヒト・モノ・コト」**に目を向け、**地域コンテンツの編集・発信**方法を学び、未来型図書館の企画・運営を支える人
- 令和5年5月に11名で結成し、図書館や地域を舞台に、編集スキルを活かして活動中！
- 「主な活動紹介」
  - 「芦城公園周辺」の施設や店舗へ取材
  - 未来型図書館noteへコラムの執筆・掲載
  - 小冊子「こまつを綴る」の制作
  - 図書館にて小冊子や取材先で聞いた「おすすめ本」を活用した企画展を開催
  - 第2期図書館エディター養成講座を開催

▲発表の様子

▲発表スライドより抜粋

※ 活動の様子はこちらをチェック☞ https://www.city.komatsu.lg.jp/soshiki/1009/zinzai/15118.html

安岡先生のご講演（リビングラボを学ぶ） ～北欧の事例を交えたリビングラボの役割について～

北欧のリビングラボの「定義」について

・リビング：実生活の場　ラボ：試しながらモノやコトを生み出す、生まれ続ける
・共創（Co Creation）が大切なポイント

生活者（市民、ユーザ）、企業、行政（地方自治体）、研究機関など、多様なステークホルダーが集まり、課題解決や価値創造に向けて一緒に創ること、長期にわたって続けていくことが核となる。

コペンハーゲンの水害対策の取組み事例

・地域住民や企業、 行政が一緒になってワークショップを開催し、専門家も巻き込みながら解決策を見出した。
・住民から出てきたアイデアから実装されたものもある。

北欧のリビングラボの基盤

＝「自分たちがこうしたい」「こうしたらいいんじゃないか」 という思い（ ＝ 共創 ）

大切なこと
・市民が集まること、そしてそこからアソシエーションが生まれること。
・いろいろな背景を持った人たちが一緒に創ること。
・1回創って終わりではなくて、新しいモノ・コトが生まれ続ける、循環、継続していくこと。

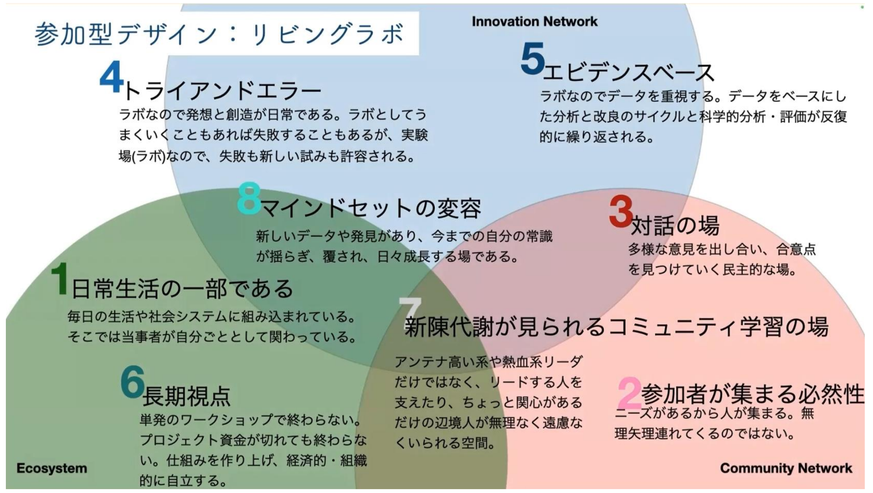
リビングラボの考え方

・北欧では、「リビングラボ」 という言葉を使っていなくても、その考え方が根付いている。
・目に見えるものだけではなく、
リビングラボの本質や背景になっていることなどを深く掘り下げて考えることが大切である。
・リビングラボは日常生活の実証実験の場であって、重要なのは「当事者意識」。
自分や地域の課題に主体的に取り組んでいるか、 トライアンドエラーで模索しているか、
そういったことをみんなで行う場として「リビングラボ」がある。

北欧の社会システムの構築の鍵は 「共創」

・リビングラボに取り組んでいく上で、「相手を知ること」「理解を深めること」
「自分を理解して伝えていくこと」「変化を受容すること」「創って変え続けていくこと」が大切である。
・中心人物が抜けた場合でも、上手く回る仕組みが重要。認識、理論化することで、みんなが使えるツールになる。
参加型デザインやリビングラボでそうしたことを伝えることができれば一番良い。

北欧のリビングラボにおける8個のマニュフェスト



▲安岡先生の発表スライドより抜粋

リビングラボは誰が主導するのか？（3つの事例を紹介）

01 ｜ Roskilde Festival

・市民主導の屋外音楽・アートフェス。
・ITやデータの活用、テクノロジーの実装。
・3万人のボランティアで運営。

02 ｜ DOkk1（図書館）

・13年間の市民対話にもとづくデザイン。
・NPOや企業などが協働し、様々なサービスやイベントが開催。

03 ｜ AL2

・企業が主催しているリビングラボ。
・コペンハーゲン中心地のカフェ2階に設置。
・若い世代をターゲットにカフェと連続したカジュアルな対話の場を設定。

小松市のリビングラボについて

『小松市のリビングラボは面白く、日本のリビングラボのカタチを創っていっていると思う。』

『基本構想のコンセプトなどをみても、みんなで未来型図書館を言語化、可視化している点が良い。』

『様々な人が参加しているのも素晴らしく、市民のアソシエーションが創られていて、
みんなが自分の想いを持って、アイデアを持ち寄ってプロジェクトが実施されているように伺える。』

ご講演の最後に

『北欧のリビングラボはみんなで模索しながら、
主体的に幸せを追求している。
小松市のリビングラボも、足元をみつめながら、
みんなで創っていくことが成功の鍵となる。
芽がたくさん出てきているように感じており、
これからも小松市の取り組みに注目していきたい。』

宮橋市長 安岡先生のご講演を受けて

『８つのマニフェストが印象に残っている。一つ一つの項目が面白い。
日本は失敗が許されない雰囲気、文化があるが、
失敗やトライアンドエラーが許容されているというのが北欧の考え方なのだと感じた。
一方で、単純に何でもやってみるのではなく、きちんとしたエビデンスに基づいて、
データを活かしながら取り組んでいるのがポイントだと思う。
また、「創って変わり続けること」が大事であるとの点について、
未来型図書館づくりは、単なる施設づくりではなく、日常的に対話をしながら、市民生活やまちづくりにとって良い変化が生まれ続ける場所を創りたい、という思いで取り組んでいる。
リビングラボの考え方が未来型図書館づくりと親和性があると改めて認識した。』

安岡先生 こまつリビングラボへのコメント・アドバイス

『トライアンドエラー、間違いを許容するのはなかなか難しいこと。北欧はうまくいっているように思えるかもしれないが、苦労していることもあるからマニフェストを作成して取り組んでいるのだと思う。
少しずつでも良い方向に進んでいけるツールとして活用している。』

『これまでの小松市のリビングラボの取り組みについては、子どもたちからシニア、
若い女性など様々な人が集まっていること、そして市長が参加されていることが素晴らしい。
一見、一致団結しているようにみえる場合でも、マネジメント層やリーダーの参画が進んでいないケースも多く、活動が頓挫するパターンもある中、様々な人がコミットしていることが素晴らしい。』

『ワークショップに参加したいくらい楽しそうな雰囲気が伝わる。写真を見ていてもアクティビティが盛んであることが受け取れ、一人一人が意見を出し、みんなで対話している雰囲気が伝わってくる。』

『おこなったことを可視化し伝えている点も良い。WEBサイトに報告書として掲載し、みんなが見てわかるようにビジュアル化したり、みんなで考えてきたことを未来予想図として可視化している点も良い。』

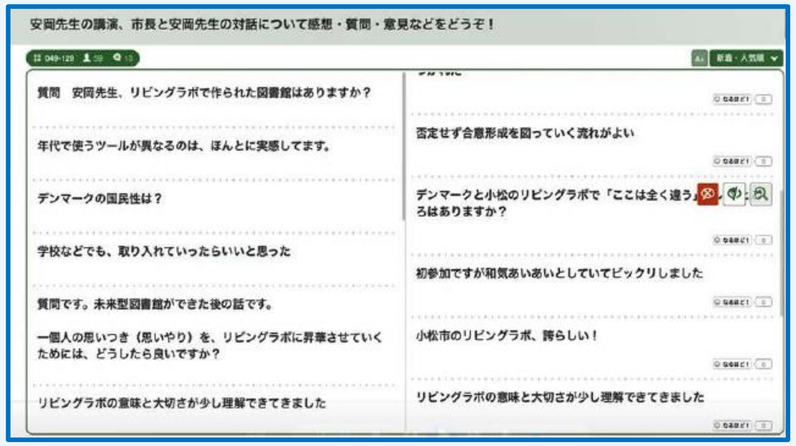
『１つアドバイスするのであれば、様々なメディア・チャネルがあるなかで、冊子やHP,noteなども活用しているが、もっともっと情報発信の面でできることがあると思う。
世代によって使用しているチャネルが異なるため、色々なチャネル、方法で情報を流すことが大事。』

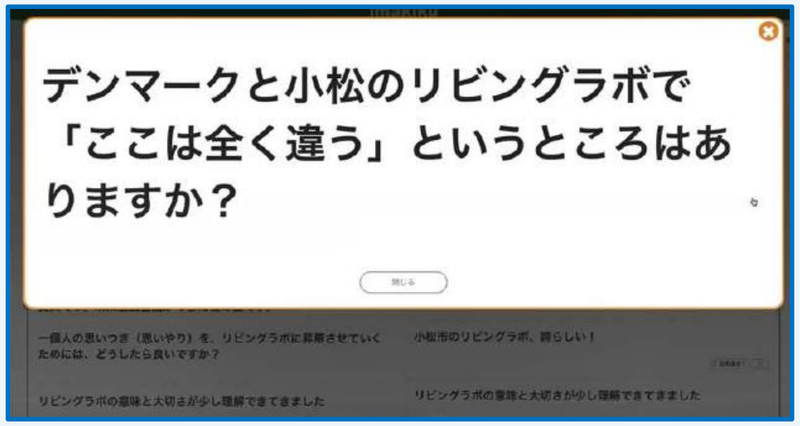
『これだけ市民や行政、議員の方がフラットに対話している場は北欧でも珍しく、誇っても良い点。』

野末先生 「イマキク」を使った参加型トークセッション

野末先生のご紹介＆レクチャーより、リアルタイムのアンケートツール「イマキク」を活用し、参加者のみなさんの思いや意見などをお聞きしながら行う参加型のトークセッションに挑戦しました！

安岡先生の講演や宮橋市長と安岡先生の対話の感想・質問などについてたくさん投稿されました。



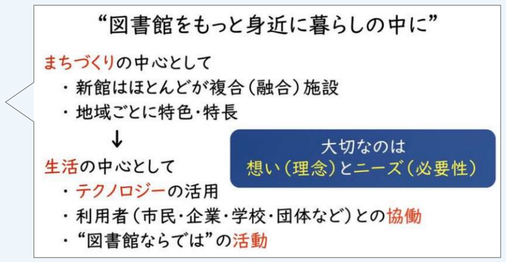


▲リアルタイムで表示される「イマキク」の画面を抜粋

みなさんの感想・ご質問に関する
宮橋市長、安岡先生、野末先生のご回答は
後ろのページでご紹介します！

野末先生　図書館とまちづくり

『図書館の役割は、利用者と資料や情報を結ぶだけではなく、「活動」を結ぶ次の段階に来ており、小松市の未来型図書館づくりはまさにこれに該当する。
みんなの活動を図書館が支えていき、まちづくりや生活の中心となり、生活がより良くなっていくことに図書館が貢献する。
そのためには、「テクノロジーの活用」や「利用者協働」によって、図書館のできることを拡げるとともに、「想い（理念）」と「ニーズ（必要性）」を見極めて、優先順位をつけていくことが大切である。』



▲野末先生の発表スライドより抜粋

宮橋市長　「小松市2040年ビジョン」について

『「裏日本」という言葉は、昔はあまり良い意味で使われていなかった。
しかし、裏技や裏メニューなど良い言葉もたくさんある。「裏」という言葉には、「知る人ぞ知る」という意味もあり、小松市では良い意味で捉えて使用している。時代の変化とともに価値観も変化しており、あえてカタカナにして、新しい意味での「ウラ日本」、これから逆襲をしていこうというメッセージを込めている。』

『「小松市2040年ビジョン」では、6つの都市像を掲げており、
「ワンランク上の生活空間あふれるこまつ」に未来型図書館を位置付けている。
60年間同じ景色だった芦城公園エリアが一変するプロジェクトとなる。
『図書の「館」ではなく、みんなが集い、活動できる場所となり、
快適さや便利さ、幸福感が感じられるキーステーションを目指していきたい。』

※ビジョンはこちらをチェック☞ 2040年ビジョン／小松市ホームページ (komatsu.lg.jp)

安岡先生　未来型図書館開館までにリビングラボが担える役割、未来型図書館を拠点としたまちづくりへの展開

☑未来型図書館開館までにリビングラボが担える役割

『まずは、リビングラボの「もの」「こと」の部分を大切に。
図書館は「もの」であると同時に「こと」が起こる場所。そこを充実させていくことが大事であり、活動のためのインフラ整備やプラットフォーム（コミュニティ、アソシエーション等）の充実に取り組んでほしい。』

『「小松市2040年ビジョン」もとても素晴らしい。
あるべきまちの姿が描かれており、現在からの出発ではなくバックキャストで描かれており、これからマイルストーンをどのようにつくるかが重要。 』

『小松市には様々な芽がいっぱいあり、小松の特徴やまちのアクティビティを可視化していくことも大事。
人の能力の拡張もできる「デジタルの活用」も大事にしていってほしい。』

☑未来型図書館を拠点としたまちづくりへの展開

『未来型図書館の整備後は、これまでの活動をどのように続けていくのかが大事。
そのためにも場所があることが大事。今から、長期的な視点で仕組みづくりに取り組んでほしい。』

『それぞれの人がやりたいこと、こうなったらいいという思いを後押しするサポート体制も大事。短期の資金提供やアドバイザー、場所を活用したいときのレクチャーなど建物を組み合わせて様々なサービスを提供することも大事である。』

『情報の発信や可視化など、様々なチャネルを使った呼びかけを継続的にできると良い。』

参加者のみなさんの投稿　トークセッションをうけて、参加者のみなさんからたくさんの意見・アイデアが投稿されました！

☑テーマ：「小松市がどんなまちになってほしいか」

『小松市民、皆が誇れるまち、
「小松市が好き」という思いが溢れ、進化し続けるまち』
『「小松に住んどれん！」と自慢できるまち』
『世界に自慢できるまち。ここに遊びにきたい！と思わせるまち』
『オシャレなまち』
『年代の交流が活発なまち』
『いろんな世代が一緒に暮らすまち』
『大学生が離れないまち』
『若者がたくさん集まってくる、そして離れないまちになって欲しい。』
『世界の裏番長』
『金沢への通過ポイントにならないように!!』
『観光の拠点もでき、子育てが充実している小松市の人が増えて欲しい』
『明るく賑わう！』

☑テーマ：「リビングラボがこんなふうになったらいいな」「リビングラボでこんなことをしてみたい」

『バーチャル空間でアバターでリビングラボ
固定概念を外して自由に意見が交換できる』
『ネット参加型のリビングラボ』
『PRを兼ねてVRスペースでやってもいい！YouTube、SNSでライブ配信！』
『デジタルばかりでなく、生身の人間の温かさを』
『町内くらいの小さい単位でもリビングラボが盛んに行われたらいい』
『私の町内は限界集落で、ほかの限界集落の町と本気でリビングラボしたい！』
『関心が薄い人たちも巻き込んでいける話し合い』
『これからの未来を背負う若者（小学生、中学生、高校生、大学生）が、
もっと積極的に参加できるもの』
『市民全員参加』
『食事をしながら』
『イオンなどでのリビングラボ』

☑テーマ：未来型図書館づくり、さらにはリビングラボにおいて、「自分が何をしていくか、今からできるちょっとしたことや小さな一歩」について宣言や抱負

『町内のシニアにスマホの使い手を増やす』
『SNSなどを利用してリビングラボの活動を広報します！』
『未来型図書館をテーマにした落語をつくる』
『周りの人（家族、友達など）に今日の話を広める！話し合う！』
『子ども司書クラブを広める！！続ける！！』
『４年生になったら子ども司書になる』
『将来、こまつ一番の消防士になる!!』
『小松市YouTuberになる！』
『小松の色んなところに行ってみる』
『小松を知る』
『小松市民であることに自信を持つ！』
『小松市の魅力を発信する』
『今までの活動を振り返る』
『次は誰か「１人」でも、連れてきます』

当日ピックアップされたものや、
参加者の「なるほど！」スタンプ数が
多いものなどを中心に掲載しています。
他にも数多くの意見・アイデアがあり、
安岡先生、野末先生、宮橋市長から
「これだけアイデアが出てくることは
大変珍しく、素晴らしい！」
とコメントをいただきました！

安岡先生　トークセッションを終えて

『今回のリビングラボでみなさんからエネルギーをもらった。
北欧はリビングラボの先進国と言われているが、小松市のみなさんの中からは、
私の思いつかなかったような様々なアイデアがたくさん出ていた。
そういった思いなどを大切にしながら活動を進めてほしい。
小松市のリビングラボは、きっと素晴らしいものになり、
日本や世界に類をみない試みになると思う。』

野末先生には、図書館とまちづくりについてのお話、
全体のファシリテーション、「イマキク」の運営等を担っていただき、
楽しくあっという間のトークセッションとなりました！

宮橋市長　トークセッションを終えて

『今年度の最後に良い振り返りできたと感じており、
来年度に向けた良いエネルギーになったと思う。
未来型図書館については、自分が言ったのはこの「未来型図書館」という言葉
だけであり、中身や何が「未来型」などは全く決めていなかった。
1年目の時には勉強会や調査・研究を行い、2年目からは図書館エディターや
子ども司書養成講座など、開館を見据えた人材育成をスタートさせた。
未来型図書館は何もなかったところからスタートしたプロジェクトであり、
「可視化」できるところまできたのが成果であると捉えている。
これから、より明確なものに、未来予想図として描いたものを実現していくため、
来年度は基本計画づくりに取り組んでいく。より良い計画にしていくためにも、
みなさんには継続して参加してほしい。
そして、身近な人と日常的に様々なお話をしていただくことで、
リビングラボが充実し、まちづくりにも活かされると思う。』

▲掛け声は、小松市のまちづくりのスローガン「小松を明るく、にぎやかに!」

最後に記念撮影を行い、
第5回リビングラボは大盛況で
幕を閉じました。

リビングラボにご協力いただいた
先生方、参加者のみなさん、
本当にありがとうございました!!
来年度もワクワク、楽しい
リビングラボ、未来型図書館づくり
に取り組んでいきます。

講演・トークセッションに関するQ&Aコーナー

みなさんに投稿いただいたご意見・ご質問について、
後日、宮橋市長、安岡先生、野末先生よりご回答をいただきました！

Q 市長が言っていた基本計画とは何をするのでしょうか？
もう意見は言えませんか？

Q 市民の意見を本当に反映した施設にするには、
市民は実際の計画でどう関わっていけばよいでしょうか？

A（宮橋市長）

来年度（令和６年度）には、令和４年度の「基本構想」及び
令和５年度の「官民連携事業調査（事業方針）」を踏まえ、
市民みなさんとの対話を通じて基本計画の策定を目指します。
基本計画は、複合施設の主要機能の考え方や規模をさらに整理・具体化させるほか、整備計画・管理運営計画の作成や事業計画の作成などを行いながら、今後の設計・整備に取り組む上での方針を示すものです。
基本計画づくりにおいても、リビングラボを通じて、市民のみなさんからのアイデアやご意見をいただき、対話を行いながら進めていきたいと考えています。
市民のみなさんとの対話を大切に未来型図書館づくりを基本計画に限らず、その後の設計などのプロセスにおいても継続して進めていきます。

A（野末先生）

リビングラボのような場を通して計画に関わったり、市に意見を直接伝える以外にも、市民同士で新図書館について考えたり、意見を交換したりする場を設けるとか、個人でもグループなどでも意見・希望などを発信したりするといったことが大切だと思います。新図書館を使うのは市民の皆さんですから、その意見が各所で拡がっていくことが計画をより良いものにする基盤となると思います。

Q より多くの市民に当事者として参加してもらえるようにするには？(ワークショップに参加しているのは、一部だと思っています。)

A（安岡先生）

市民参加が盛んであるといわれる北欧であっても、100%が参加するわけではありません。皆が自分の関心の範囲でできることをできる時に参加しています。それが、長期的に参加するための第一のコツなのだと思います。そのような中、皆さんのように面白い！やりたいと思って参加される方々がいます。そのような方々が、継続して参加できる環境があることが大切であると考えています。面白いと考えた人たちが次回に一人お友達を誘ってみる、そこから始まるものもあると思います。

A（野末先生）

いろいろな方法が考えられますので、より多くの市民が参加しやすくする手立てを3個だけ挙げてみます。

- 1つ目は、バリエーションを増やすこと。人によって興味のあるテーマや参加しやすい曜日・時間や時期は様々ですので、少しずつテーマを変えて、また、平日の昼間、夜、土・日など時間帯も変えながら開催してみます。回数が増えるようであれば、一回あたりの時間を短めにするなどの工夫も考えられますね。（短い時間のほうが参加しやすいというメリットもあります。その分、できることは限られてしまいますが…。）
- 2つ目は、市民に企画から関わってもらうこと。1つ目とも関連するのですが、市民が取り組んでみたいテーマを持ち込み、企画・運営にも関わっていきます。ここでいう市民とは、個人に限らず、学校、企業、団体などのグループや組織を含みます。1つ目に挙げたようにバリエーションを増やしていくと、主催者側の負担が増えるので、市民が企画・運営に関わることは、その負担を軽減することにもつながります。
- 3つ目は、参加者のいるところ（市内）に「出かけて」いくこと。市役所などで開催することは準備や進行などにとっては有利なのですが、市民からすると出向く必要があります。そこで、市内の企業、学校、公園・施設などに出向いてワークショップ等を開催することが考えられます。2つ目に挙げた市民が企画・運営に関わる場合にとくに馴染む方法だと思います。オンラインを活用した開催方法もいいですね（例えば、掲示板的なツールを使えば、オンデマンド型のワークショップも可能となり、それぞれが都合のよい時間に参加・交流することもできます）。

講演・トークセッションに関するQ&Aコーナー

みなさんに投稿いただいたご意見・ご質問について、
後日、宮橋市長、安岡先生、野末先生よりご回答をいただきました！

Q
町内会の広報の担当です。
地域とのつながりが少ない方をリビングラボのような舞台に出てもらう、交流してもらう、意見をピックアップするなどの仕掛け、何がキーなのでしょうか？

A（安岡先生）
長期視点が必要なのだと思います。何に関心を持つかはそれぞれの人で異なります。たとえば、友達に会うためにイベントに参加する方であれば、そのような機会をうまく使う必要がありますよね。
晴れた日の公園になぜ人が集まるのかというと、気持ちが良かったり、何か面白いことが起こりそうだったり、美味しいものが食べられるからだったりします。そのような仕掛けは幾らでも考えられるはずです。

Q
北欧の図書館はかなり個性的なものがありますが、小松と同様にリビングラボを活用されている事例ありますか。

A（安岡先生）
リビングラボは全ての基本です。リビングラボという言葉を使ってなくても、実践はほぼ１００％されていると言っていいと思います。

Q
リビングラボのマニフェストで、注意すべき点、注力すべき点は？

A（安岡先生）
どれも重要ですが、コンテキスト（場面・状況）によって、取捨選択が必要になってくると思います。そのためのマニフェストだと考えています。

Q
デンマークの国民性は？

A（安岡先生）
日本と似通っているところも多い、と日本通のデンマーク人はよく言います。
ちょっとシャイで実直。真面目に物事をこなすところでしょうか。
また、シンプリシティ、自然崇拝、なども類似点としてよくあげられます。

Q
話し合いを活発にするためには何が大切ですか?

A（安岡先生）
多様性を認めること。自分の意見が受け入れられないかもと思うと、発言も躊躇しがちになります。それぞれの意見や考えが違って当たり前であるということが常識になっていくことが重要だと思いますし、その過程においては、「人の意見を否定しない」「違う意見を言う」という制約(ルール)を課すことで、発言が活発になるかもしれません。

A（野末先生）
いろいろ考えられますね。ワークショップ等の趣旨などにもよると思いますが、これまでのワークショップのように、「他者の発言を否定しない」「最後まで聞く」といった環境づくりの他に、3つだけ例を挙げてみます。
(1)ある程度「型」を決めておく。これまでのワークショップで「寸劇」が話題になりましたが（笑）、「こういうことを聞くので、こういう感じで答えてください」というパターンをつくって進めていくと、比較的、皆さん、話しやすくなると思います。あらかじめ個人ワークで話すことを手許の用紙に記入しておいて、グループワークではそれをもとに話す、というのも「型」のひとつですね。
(2) 事前の準備をしておく。当日の話題などをあらかじめ案内しておいて、自分の意見を考えておいてもらうのもひとつの手です。関係する資料などを持ち込むこともありえますね。
(3) 他者の発言に“乗る”。自分から考えてしゃべり出すのは難しくても、他者が話したことに対して、「それならこういうこともあるかも」「私ならこう感じるかな」という風に反応するのは、自然にできることが多いのではないでしょうか。ある人の発言に対して、進行役が別の人に「感想」を求めていくと良いでしょう。これ以外に、例えば、「書く」という方法もあります。これまでのワークショップでは、個人ワークで考えたことを手許の用紙に記入しておいて、グループワークではそれをもとに話すことがよくありましたが、グループワーク自体も「書く」ことをメインにするという方法です。というのは、その場その場で発言するのが得意ではない人もいますので、記入する用紙（例えばひとつの質問ごとに一枚）を用意して、一人が発言を記入し、それを受けて別の人が発言を記入していく、という方法です。いわば用紙のうえでディスカッション・意見交換をするわけです。ゆっくり考える人には向いている方法です。ネットを使う手もありますね。文字で記録が残るというメリットもあります。

講演・トークセッションに関するQ&Aコーナー

みなさんに投稿いただいたご意見・ご質問について、
後日、宮橋市長、安岡先生、野末先生よりご回答をいただきました！

Q
継続が一番むずかしいと思います。
どんな風に進めたらいいのでしょう。

A（安岡先生）
継続するための仕組みを作っていくことは大切です。
外の資金やリソースだけでは、他人任せになりますので、継続は難しいと思いますし、頑張る人が少数いたとしても疲弊していくことが目に見えています。この点に関しては、多くの知見がCommunity Studyなどで蓄積されています。また、時には、新陳代謝（古い人が抜けて新しい人が入る）が重要な役割を果たします。気軽に入れる工夫、気軽に抜けられる仕組みも、継続には重要です。

A（野末先生）
逆説的ですが、継続を目的にしないことがポイントだと思います。そのときどきで「近い」将来を見据えながら、希望・必要に応じてやりたいこと、やるべきことをやっていくことで、結果として継続すればいいな、という考え方ができるといいのではないかと思います。必要・希望がなくなれば、途中で辞めてもいいわけですので…。これはもちろん継続しないほうがよいと言っているわけではありません。いまのかたちでは中止・終了するけれど、じつは必要・希望に応じてかたちを変えながら（大きな目で見たときには）継続しているという活動は、意外とたくさんあるのではないでしょうか。ちょっと抽象的な回答になってしまいましたが、人、お金、場所などの資源は限られていますので、常に優先度を考えながら進めていくことが持続可能性を高めることになると思います。

Q
無関心あるいは反対の方は議論に参加した方が良いですか？

A（安岡先生）
無関心は一番難しいですね。
反対の方は積極的にアプローチしていくべきです。

Q
質問です。未来型図書館ができた後の話です。
一個人の思いつき（思いやり）を、リビングラボに昇華させていくためには、どうしたら良いですか？

A（安岡先生）
仕組みづくりが重要です。
例えば北欧には、５人集まれば、アソシエーションを作ることができ、法人格が得られ、ちょっとした資金の調達が簡単に出来るようになります。社会活動がしやすくなり、公共機関(場所や専門家への相談など)が一気に使いやすくなります。一方で報告義務や情報公開の義務など制約が生まれます。5人が小さくても一つのことを成し遂げようと集り、法的に合意することは、簡単なことではなく、思いつきをきちんと外在化して言語化することが必要になります。でも同時に、本当に社会的価値があるのであれば、５人ぐらいは、すぐに集まるのです。
そのような仕組みをローカライズさせて考えてみませんか？

A（野末先生）
私個人としては、「まずは一人にそれを伝えていく」ということだと思っています。「思ったこと」「考えたこと」を家族でも友人でもいいので、少しずつ他者に共有していくことで、その人の意見が加わり、「個人」の「思いつき」ではなく、「みんな」の意見になっていき、より良いものになっていきます。「議論をする」というと、何だかケンカでもして、相手を言い負かすように聞こえるかもしれませんが、そうではなくて、「意見を育てる」と捉えるのが適切だと思います。こうして、みんなで意見を育てていくと、「では、それを実現するために〇〇をしよう」とか「××で困っているなら、△△について考えてみよう」という話しに繋がっていきます。これこそがまさに「リビングラボ」そのものです！実は私たちが普段からそうしているように、自分の「思ったこと」「考えたこと」を身近な人に伝達したり、相談したりすることを「自覚的」に行なっていくということなのだろうと思います。ただ、そのための「場」として図書館が用意されているということによって、「昇華」がしやすくなるということだと思います（しやすくなるような仕組みを図書館に用意したいということでもあります）。

講演・トークセッションに関するQ&Aコーナー

みなさんに投稿いただいたご意見・ご質問について、
後日、宮橋市長、安岡先生、野末先生よりご回答をいただきました！

Q 安岡先生のリビングラボの説明が、非常に分かりやすかったです。もっと、多くの方に、小松市の取り組みを知ってもらいたいなぁと思いました。デンマークでは、周知はどのようにしていますか？

A（安岡先生）

周知は戦略的に進める必要があると思います。
チャネルは無限にありますが、一つのチャネルだけで全ての人に伝わる時代は終わりました。６０～８０代であればテレビ、４０～５０代であればFB、ティーンであればインスタなどの複数のチャネルを用いて、それぞれに何を伝えたいかを戦略的に積極的に考える必要があります。

Q 広島県の安芸高田市や兵庫県明石市に並ぶような、全国に名前が広まる小松市になるにはどうしたらよいと思いますか？

A（安岡先生）

多くの人が多くのチャネルを使って発信すること、だと思います。
私は、「広島県の安芸高田市や兵庫県明石市」がどのようなことをしているのか知りませんが、小松市の方のコンタクトが、海外に住む私にチャネルを開いたと思っています。
そして、さまざまな資料が簡単に入手できた事で、さらに関心を高め、知見を高めることができました。

A（野末先生）

「日本初」「日本一」を冠したものがひとつでもあると違うと思います。

Q 質問　安岡先生、リビングラボを活用して日本で関わった図書館プロジェクトはありますか？

A（安岡先生）

残念ながらありません！でも、北欧の図書館の良い部分を多くの人に知ってもらいたいと思いますし、そんな北欧人が楽しんでいる要素が日本の図書館に増えて欲しいと願っています。

Q 色んな事例がありましたが、リビングラボの概念がありきで、それに従った活動だったのか？
先に活動があって、先生の目で見て、串刺し的にリビングラボという概念を作りあげたのか？どちらなんでしょうか。

A（安岡先生）

リビングラボのコンセプトというものは説明の際にはわかりやすい枠組みと思いますが、いつもコンセプトが先にあると考えると本質的ではないと思います。
うまくやられたものを分析してみたら、リビングラボという枠組みに上手く当てはまっていることがわかったということも多分にあります。
リビングラボという言葉を使ってなくても、リビングラボ的な特徴が見られることが多々ありますし、逆にリビングラボと言っているけれども、私が考える特徴が見られない場合も多々あります。

Q 日本にはない、デンマークならではの図書館の機能はありますか？

A（安岡先生）

騒いでも良い場所、本を軸にしない、でも知的好奇心を刺激するような試みがたくさんあります。人は目(文字)からだけではなく、五感を使って学ぶことができます。聴覚、触感などから学べるような仕組みが、今の北欧の図書館では提供されることも多いです。
例えば、Team Labのような視覚や聴覚、触感をつかった学びをイメージするとわかりやすいかもしれません。

A（野末先生）

横からすみません（笑）。日本の図書館界でも、北欧の図書館は注目されていて、例えば『デンマークのにぎやかな公共図書館』（吉田右子著、新評論）など、書籍も結構出ています（デンマーク以外の国の図書館について紹介した書籍もいろいろあります）。手に取ってみてはいかがでしょうか？　「図書館は静かに本を読むところ」「図書館は本を借りて帰るところ」という考え方は、けっこう日本的なものであることがわかります。ただ、日本でも、この考え方は変わりつつあり、「コモンズ（広場）」概念が日本に入ってきた2000年代半ば以降は、「活動の場」としての図書館という理念・建物も拡がっています（私のミニレクチャーでも触れましたが）。なお、上記書籍著者の吉田右子先生は、私の大学院時代の同期です！

講演・トークセッションに関するQ&Aコーナー

みなさんに投稿いただいたご意見・ご質問について、
後日、宮橋市長、安岡先生、野末先生よりご回答をいただきました！

Q リビングラボを意識するのとしないのでは差がありますか？

A（安岡先生）

「自分たちはリビングラボをするのだ！」と宣言しなくても、
本質を理解して実施できる人もいると思いますが、枠組みがあることで、多くの人からアクセスしやすくなっていると思います。言葉があることで生まれる認知の広がりや認識は軽視できないと思っています。
「リビングラボ」手法には、さまざまな状況におけるさまざま人たちの知見が蓄積されています。その知にアクセスすることは近道を知ることだと思っています。

A（野末先生）

個人的には「リビングラボ」という概念あるいは方法論にこだわり過ぎなくて良いと思います。ただ、いろいろな考え、立場の人がいる中で大事なことは、皆で目指す方向性を共有することでしょう（例えば「皆が幸せに暮らせる小松市をつくろう！　そのために一人一人ができることを考えよう」とか）。意見は違っても同じ方向をみているとでも表現したほうがいいかもしれません。大切なことは、かたく言えば、達成したい成果（物）は何かというところが（ある程度）一致していること（これを大人の社会では「落としどころ」などと呼んだりするのかもしれませんが（笑））でしょう。ただ、そのために「リビングラボ」という枠組みはとても有効だと思います。皆で「実験」をしている（トライアンドエラーができる）という「空気」は一歩踏み出すにはほぼ必須ですから。

Q デンマークと小松のリビングラボで「ここは全く違う」というところはありますか？

A（安岡先生）

小松のリビングラボが面白いのは、今まで見た日本のどこのリビングラボに比べても、北欧色が強いところだと思っています。一人一人の市民の顔がみえてくるようなリビングラボ、トップダウンとボトムアップのバランスがとれている（ようにみえる）ところなどです。

Q 市民で議論したものが実際に計画段階になると、削除される例が多い。多少無理でも、ここで出た意見は実現して欲しいと思います。そのために必要なことは何でしょうか？

A（宮橋市長）

未来型図書館創りとしてリビングラボに取り組んでいますが、図書館以外で代替することも考えられます。例えば、他で実現できる場所があったり、民間で同様のサービスを実施していたりすることもあると思います。
今後の基本計画において、スペースなどの制約が出てくる中で、未来予想図の内容をどれだけ多く実現できるか難しい部分ではありますが、楽しみな部分でもあると思っています。
図書館に限らず、小松市の中で、なるべく多くの意見を実現できるように取り組んでいきたいと思っています。

A（安岡先生）

多様性を達成するには、また、民主主義とはどのようなことを言うのかということが、もっと広く議論されると良いと思います。１００人いれば１００人の意見があり、一つの社会で１００の提案全てを実現することは困難です。では、どうすればいいのか。どのような意見があるのかを全ての人が知ること、その上で、皆が変わっていくことが必要だと思っています。A,B,Cの意見がある時に、A,B,C全てを叶えることは物理的に不可能かもしれませんが、新しく皆が納得するEを皆で創造すればいいのです。

Q リビングラボに参加しない人にどう周知していけばいいでしょうか？

A（安岡先生）

諦めるのが一番よくないです。様々なチャネルをつかって、伝える努力は継続するべきです。多分まだ、その人の琴線に触れるところまでに達してないだけなのでしょう。